



遍路道から見えた

【讃岐富士】

第11回四国あるき遍路の旅

高

第11回四国あるき遍路の計画にあたり、11月の連休をかけて3泊4日で行こうなどという大胆な意見があり、出発は23日(木)の祝日となった。次の金曜日に休みを取れば、土日とあわせて4連休になるのである。

しかし、よくよく考えると、4日間歩き通すのは私たちの脚力・体力・気力から考えると無謀だと気づき、結局いつもどおり2泊3日に落ち着いた。ところが、出発日を変更しなかったため、航空券は団

体割引を使ってもあまり安くならず、いままでの遍路で一番高い参加費となってしまった。

それでも、以前見た旅行会社の歩き遍路ツアーに比べれば、2万円ぐらい安いことに免じていただいたと見えて、参加者は21名。今回は住職夫人も初参加である。

結願目前のへんろ旅に胸を高鳴らせて、高松空港に向け、いざ出発。

こんぞうじ

高松空港から76番金蔵寺へ

安

羽田空港は出発ラッシュの時間と重なり、飛行機は遅れた。

当初の予定は、高松空港から空港リムジンで琴平まで行き、琴平からJRに乗って善通寺下車、ここから今回最初の札所まで歩く予定だったが、到着時間が遅れたため、この予定は変更せざるを得なくなった。当初の予定通りでは、今日の宿まで着かない可能性が出てきたのだ。

そこで、空港からタクシー分乗にて、最初の札所「金蔵寺」まで行くことにした。あるき遍路でタクシーに乗ることは、非常に気が引ける。今までは公共交通機関のみを利

用して、長距離のところを移動してきているので、なおさらである。しかし、計算してみると、空港リムジンとJRを乗り継いでいく運賃と、タクシー分乗の乗車料金では、タクシーの方が安いのである。

それでも、札所に横付けするのは憚られ、最寄の金蔵寺駅に下ろしてもらった。ここから金蔵寺までは200m、いよいよ歩き遍路のはじまりである。



琴電バスの空港リムジン

第1巻 第1号

平成18年12月16日

目次:

七十六番金蔵寺	2
七十七番道隆寺	3
七十八番郷照寺	4
七十九番高照院	6
八十番 国分寺	7
八十一番白峯寺	9
八十二番根香寺	11
八十三番一宮寺	13

76番 金蔵寺

寺の創建は、弘法大師の姪を母にもつ智証大師円珍です。円珍は、天台宗専門派の開祖であり、唐留学で天台密教を学び、大師と同様に唐の青龍寺を参考に伽藍を造営し、自刻の薬師如来を本尊としました。また明治の偉勲、乃木将軍が善通寺第十一師団長の頃、本寺の客殿を宿泊所としていました。妻の静子夫人が面会に来ましたが乃木将軍は拒否。夫人はしばらくの間、境内の松の木の下に佇んでいたといえます。この松が「乃木将軍妻返し松」です。



味

金蔵寺駅は、駅員さんもないこじんまりした駅である。駅前の空き地に自転車が並んでいることを除けば、電力会社の保安施設か何かを思わせる建物だった。

門前町を歩けばそれとなく歴史を感じさせてくれる軒の低い建物が並んでいる。程なくすると、神社の鳥居の前に出る。ここが札所かと思うが、どうも様子が違う。先を見ると、それらしき石塔などが見え、こちらが金蔵寺の正門である。どうやら、神仏分離の影響で、お寺の正門は脇に追いやられたのだろう。

正門の仁王門をくぐると、正面に本堂が堂を構えている。本堂前の石畳も広く、たくさんのお参りの人が来ることが想像される。いつもどおり、本堂と大師堂で般若心経を詠んで、今回最初のお参りを済ませると、はや昼時。休憩所にいた住職と思いき人に、インターネットで調べたうどんやさんの場所を尋ねると、丁寧に

教えてくれたが、最後に、「でも、その店より、お寺の裏のうどんやさんの方がうまいよ。」と言われ、さぬきの人の言うことを聞いて、お寺の裏のうどんやさんに行くことにした。

金蔵寺の住職に教えていただいたうどんやさんは、「香の香」と書いて「かのか」という店だった。店の案内では、香川の香りということで、「香の香」と名づけたという。ちょうど昼時、広い駐車場は車がほほいっばいだった。21名の団体が入って大丈夫だろうかと思うが、うどんは日本のファーストフード、カウンターで注文をすると程なく釜上げうどんが運ばれてくる。ご主人らしき人が、大徳利に入っている汁の注ぎ方を教えてくれる。テーブルの上の、ねぎやしょうが、ごまなどの薬味をたっぷりいれ、ゆでたてのうどんをすすると、もっちりとしたうどんが身体を温めてくれた。どんぶりに残ったゆで汁も、そば湯に引けをとらないほどうまい。「香の香」の名前どおり、小麦粉の香りまで味わうことが出来、讃岐の遍路が始まった感を強くした。



忘

金蔵寺について、お経を詠む準備に頭陀袋をまさぐって、木魚を出そうとして、忘れてきたことに気づいた。

みんなが納経帳を集めている間に本堂の売店をのぞいて、おばさんに木魚があるかと聞くと、胡散臭そうにしていたおばさんの顔がにこやかに変わり、「ありますよ。こっちの黒檀は音がいいし、丈夫ですよ。」と高いほうを進め、商売上手である。こっちはたまたま忘れた急場しのぎの木魚と思っているので、一番小さな木魚を買い求めた。そういえば、前は警方さんが木魚係だったのを思い出した。それですっかり忘れてしまっていた。

般若心経を詠み終えて、もうひとつ忘れていることに気づいた。写経用紙である。写経講座に出かけているおかげで、写経したものを納められ、本当の納経ができると思っていたながら、出発前のあわただしさの中で、忘れてしまっている。それも、今回で、2回目か3回目である。写経するたびに、「為四国歩き遍路道中安全」とか無事結願などと為書きをしているのに忘れていたのである。次回は八十八番まで行く予定なので、次回は忘れてはならないと肝に銘じ、また、今回の歩き遍路が無事歩き終えるように気を引き締めねばと思った。



77番 道隆寺へ

静

金蔵寺から77番道隆寺へは、多度津方面に向かって、田畑の中を抜けて古い集落を通っていく。四国の地図で見れば、瀬戸内海に向かって歩いて行くのである。途中、右手後方に讃岐富士のきれいな山容が見える。

讃岐富士が住宅の屋根に隠れて見えなくなり、田の中の道を右折してアパートの間の道を行くと、道隆寺の正面の道へと出た。参道らしからぬ殺風景な集落の中の道である。それでも、正面に構える立派な仁王門が札所そうたさんであることを教えてくれる。しかし、山号の「桑多山」からすると、この辺りは桑の木が多く、おそらく養蚕も盛んだったのではと思う。集落の家々は立派な屋敷が多く、門前で茶店をしなくとも裕福だった



雨

道隆寺からの遍路道は、寺の裏から始まる。

お参りを終えてお寺の裏に出ると、交通量の多い県道である。ここから遍路道は東に向かい、丸亀市内を抜けて宇多津に入り、78番郷照寺まで約七キロほどである。

途中、日本一の石垣を誇る丸亀城にも立ち寄りたかったが、「山荘に泊るときめて日短」(高浜年尾)である。先を急ぐことにして、石垣は丸亀のビルの間から眺めるだけにした。

丸亀の市内に入った頃から、雨が降り出した。天気予報では、一日雨の予報だったので、いよいよ降り出したかという感じである。もはやあるき遍路も11回を数え、幾度となく雨に降られている一行にとっては、特に気になる雨でもなく、雨が降ったらカッパを着て歩くだけのことである。空をうらんだりしてもどうしようもないことは百も承知のこと、人間のちっぽけな力ではどうし



に違いない。

11月も末になると、遍路の姿はめっきりと減るようで、今にも振り出しそうな曇天とあいまって、わびしい感じがする。お参りしている周囲を札所の職員らしき人が、お灯明壇を掃除したりする姿も、もう遍路の季節は終わりだと告げているように感じられた。境内中に安置された観音様も、どことなく寒々しい。

たくさんある仏像の中に、衛門三郎と思われる像がお大師さんに懇願するような姿のものがあつたが、遍路の祖衛門三郎と道隆寺の関係は特にないので、その像が意味するところはよくわからなかった。

小休止して、道隆寺を後にした。

ようもないことと受け入れる、「諦める」とはこのことと身に染み付いたものである。

これは、高知と愛媛の県境、雨の松尾峠越え辺りから私たちに身についた遍路心得かもしれない。

右手に丸亀城を見て、官庁街を過ぎ、土器川を渡ると宇多津の市街に入る。先を行く人が見過ごした道しるべに従って、右の路地に入る



77番 道隆寺

寺の創建は、和氣道隆が桑の木で薬師如来を刻み、小堂を建てて安置したのが始まりです。その後、弘法大師が巡錫した折、薬師如来を刻み、道隆の作ったものは胎内仏とし、改めて本尊として安置しました。仁王門には大きな草鞋が納められ、境内には二百七十余体の観音像が立ち並び、水子の霊を供養する観音像や観音霊場の本尊のすべてが境内に奉納されているといえます。また、大師筆といわれる五大画像など文化財も多くあります。

昔から、「眼のお薬師さん」として、たくさんのお参りがあります。

雨に煙る丸亀城の遠望。



土器川越しの讃岐富士。

と、秋葉神社の石段の下にでる。いかにも古くからの遍路道の風情である。

車の往来の少ない旧道を行くと、「地藏餅」の看板があった。1908年から続いている老舗の餅屋さんで、昔から変わらず手作りしているおはぎや餅は、小ぶりながらぼつりとした重みがあり、素朴な味わいだという。甘辛両党の福田

さんはこの店を見過ごしたのか、店先にその姿はなかった。すでに、郷照寺に着いているのだろう。



78番郷照寺

本尊の阿弥陀如来は行基の作といわれ、当時は「道場寺」といわれていました。後に弘法大師が巡錫し、霊場に定め、伽藍など改築しました。境内に入り石段を上ると、周囲は松に囲まれ、正面に本堂があります。大師堂の横には万鉢観音の洞窟があり、本堂の前には六本の手をもつ青面金剛と三猿が座り、諸病平癒に霊験があるといます。また、前庭からは瀬戸内海が眺められ、瀬戸大橋の雄大な姿も一望できます。



78番郷照寺

和

78番郷照寺は、八十八ヶ所中唯一の時宗のお寺である。ご詠歌にも「おどりはね、念仏申す道場寺、拍子をそろえ、鉦を打つなり」と、踊り念仏のことを詠っている。

私たち一行も、札所に着くたびに木魚にあわせて般若心経を諷経しているが、木魚があるときは木魚一打に漢字一字詠むだけの単純な詠み方なのに、なかなか合わないことがある。まず第一に、うる覚えで詠んではいけない。とかく暗記して経本を見ないで詠むことがいいことのように誤解するが、正式にはお釈迦さまが説かれたことが書いてある経本は掲げて詠むのが正式らしい。覚えたと思っても、経本は掲げて詠みたいものである。

次に、お経は耳で詠めと言われる。木魚の音をよく聞きながら、そして一緒に詠む人たちの声を聞きながら詠まなければいけない。自分の詠みやすいリズムやスピード、音の高さも決まりはないが周りの人の音の高さと調和をはからなければならぬ。「拍子をそろえ、木魚打つなり」である。

全員のお経が一つになれば、同行二人と言わず全員の心も一つになるに違いない。これは、仏教の根本理念の一つ「南無帰依僧」に通じ、同行との和合である「和合僧」に合致するのである。これは、遍路に限らず、人生という遍路にも通じるに違いない。

南無帰依仏
南無帰依法
南無帰依僧

郷照寺の境内は砂利が敷きつめられ、雨に濡れた砂利が清冽な印象だった。本堂の周囲の松の木といい、境内に上ってくる参道の土手のきれいに刈り込まれたサツキといい、どことなく禅寺風の佇まいだった。

境内からは瀬戸大橋を望むことができ、遍路が雨宿りする姿とが、いにしえと現代との見事なコントラストを描いているようだった。しかし、それはそれで、今昔の調和なのかもしれない。



郷照寺から瀬戸大橋を望む。おみくじを吊り橋のロープに結んだら、願い事は必ず叶うかもしれない。





瀬戸大橋の夜景。

暗

郷照寺を下りて旧道に出たところに閻魔堂がある。うそつきの舌を抜くという閻魔様を祀る閻魔堂は、千葉ではあまりなじみがない。仏さんといえば皆優しいまなざしで、柔和な顔をしていることが当たり前と思っいる節がある。そこで、ばれなければいいという考えが蔓延しているのかもしれない。仏教にも、「懺悔」という考えがある。自ら慙愧し懺悔を行うのである。この対象として、閻魔様ほど適役はいない。子どもにとっても、目に見えない怖いものより、閻魔様という実像があった方が悪いことをしてはいけないという大人の説教が現実味を帯びてくるはずである。いじめも少しは経るかもしれない。

閻魔堂をお参りすると、暗い堂内に閻魔様の大きな姿が見えた。うそをついたり、悪いことをしていなくとも、なんとなく身を正そうという気持ちになるから不思議だ。

閻魔堂に立ち寄り、旧道を歩いていくと、へんろ地図に書いてあるアーケード街に出た。田舎町のアーケード街には、地元で取れた魚や野

菜など、その地方独特の産物が積まれているに違いないと、先を行く人を呼び戻してまで歩いてみた。しかし、開いている店はほとんどなく、さびれた田舎の商店街だった。車社会が商業施設を郊外型にした影響だろう。歩いている人とも出会わず、なんとなく暗い気持ちになってしまった。あつという間に通り過ぎれるアーケード街を抜けると、幹線道路に出た。ここから、坂出にでる峠を越えれば、今日の宿に到着する。初冬の日の短さと、そぼ降る雨、すでに周囲は薄暗くなってきた。

今宵の宿は、温泉旅館「瀬戸内荘」である。雨に打たれた冷たい身体に温泉は何よりだろう。宿に着くと、瀬戸大橋のナイト観光に無料で連れて行ってくれるとのことだった。何人かの余力溢れる人が出かけたようだったが、それ以外の人は適度の晩酌とアントニオ・セイスイさんのマジックショーに酔いしれて、はや高いびきであった。



2日目

閑

2日目は昨日の雨からそのように晴れ上がった。天気予報は曇りの予報だったが、日ごろの行いのよさを誉め合いながら出発となった。

へんろ道は、坂出の中心部を縦断していく。住宅密集地から徐々に商店街へと入っていくが、開店時間にはまだ早く、町のにぎわいは感じられない。しばらく行くと、アーケード街に入る。しかし、こちらも開店時間前だろうか、活気が感じられない。ところどころに売り地の看板があったり、売り店舗・テナント募集などの張り紙が目立つ。本町通り・元町商店街とアーケードの距離は長い、シャッター通りと化していた。

昨日、郷照寺から見た瀬戸大橋は、坂出の町に活気を取り戻す起爆剤になるはずだった。しかし、瀬戸大橋の開通に伴い、さぬき浜街道という道路が整備され、大型駐車場を備えた大型店がぞくぞくと出店し、商店街はお年寄りと自転車の中高生が通る道となったという。少し古いデータだが、平成6年12月の坂出商工会の調べによると、商店街の全店舗数421のうち、空き店舗数94。中心街の商店だけを見ると150店中、60店が廃業に追い込まれたという。空き店舗増加率全国ナンバー1という、ありがたいお言葉までいただいたのだ。

閑散とした商店街を歩いていると、自転車の中高生が猛スピードで通り過ぎていく。登校時間ぎりぎりの連中だった。

坂出の街を抜けると、へんろ道に入る。踏切を渡ると、道は山に向かって少し登りとなる。山に向かって登りとなると、この登りがこれから続くのだろうか、この山を登るのだろうかと不安になったところに、八十場(やそば)という湧水池がある。その水を使ったところてんを商う茶店があり、休憩にうってつけなので、少し休むことにした。茶店に入って、縁台にリュックを下ろし・・・、いい加減店の人が出て来てよさそうだが、人の気配はない。11月下旬にあるき遍路で、この茶店に立ち寄る人もないのだろう。結局、店の人は出てこず、誰もところてんを口にすることはできなかつた、閑な店、いえいえ閑かな店だった。



79番高照院 (天皇寺)

平安初期にこの地を巡錫中の弘法大師は、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）ゆかりの「八十場の泉」付近で靈感を感じ、近くの樹木で十一面観音と、阿弥陀如来、愛染明王を刻み、堂宇を建立して安置したといわれます。今も清水が湧く八十場。悪魚退治をした日本武尊が八十名の兵士と共に毒によって倒れたとき、この泉の水を飲んで回復したという伝説から、この泉から汲まれた水を「八十八の水」「八十場の水」と呼ぶようになったそうです。



澄

八十場の水を過ぎるとすぐに白峰宮の境内に入る。どうやら79番高照院はこのあたりと思ったら、本殿から一段下がった右側に、本堂と大師堂が片隅に追いやられたように建っていた。

神社境内の片隅に追いやられたような建物といい、高照院または天皇寺というなど二つの名前を持ったりと不思議な札所である。少し、その略縁起を見てみると、保元の乱で讃岐に流罪となった崇徳上皇が亡くなられた折、しばらくの間その棺をこの寺に安置したので、天皇寺となった。時代が下り、明治の廃仏毀釈の折に廃寺となるが、その後末寺であった高照院を合併して再興を図り、以後高照院というのだそう



だ。

お経を上げ終わると、空は快晴である。昨日の雨で空気中のゴミも洗われ、澄み切った朝の空気がすがすがしい。

遥

鳥居をくぐって境内を後にした。ここから、次の国分寺までは、約七キロの道のり、約2時間ぐらいだろう。

高照院の参道を下りながら、前方に五色台の山並みが望める。台地のような山容の左に白い建物が見え、へんろ地図で確かめると、どうやらあれが今日泊る予定のかんぼの宿のようである。我々は、その台地のような山の右の麓にある国分寺をお参りし、台地の上まで登りつき、その後右から左へと縦走して宿までたどり着くことが手に取るようにわかる。今まで、このように、これから行くルートが手に取るようにわかったことはなく、一步一步はたかが知れているが、一日でずいぶん歩ける人間の力もなかなかのものだと思いつつも、ずいぶん先は長いことを思い知らされてしまった。

石井さんがいつもながらに列の後方を歩いていると、後ろから追いかけてくる人がいたそうです。石井さんに追いつくと、500円をお接待してくれました。果たして、お坊さんに見えてお接待してくれたのか、あるいは哀れに見えてお接待

してくれたのかは、議論の分かれるところですよ。

鴨川駅前て綾川を渡り、堤防の上の道歩いていく。廃墟となった建設会社の駐車場で小休止をすると、国道11号線に出る。すでに五色台の麓である。五色台の南麓の峠を越えると、国分寺のある国分の町である。予定では、国分寺をお参りする前にさぬきうどんの昼食の予定だったが、早めに着いたので、先に国分寺をお参りして、少し戻って、「手打ちうどん・山下」で昼食にすることにした。先に到着していた武さんは、さっさと食堂に入り、後続がついたころにはすでにうどんをすすっていた。



讃岐を歩くときよく見られる形の山。左折して国分寺へ。

80番国分寺

聖武天皇の勅願により、行基が自作の十一面観世音を安置し、讃岐国分寺として開基しました。その後、平安初期に弘法大師が巡錫して、本尊や堂宇を修復し、霊場に決めました。歴史を感じさせる仁王門をくぐると、長い山道の両側には、みごとな枝振りの松が茂り、四国八十八ヶ所の石仏が並んでいます。また、本尊の千手観音はケヤキ材の一本造りで、5mの高さがあり、秘仏なので拝観はできませんが、国の重要文化財に指定されています。



80番国分寺は、名前にふさわしい佇まいだと思った。間口の広い仁王門、本堂への参道両側の松の木、かつて巨大な建物があったことを思わせる大きな礎石など、荘厳な空気を感じることができた。本堂も古い様式の落ち着いたのある建物である。みんなでお参りしたあと、石井さんが1人静かにお参りをしていた。(右写真)途中で500円お接待して下さった方の分もお参りしていたのだろうか。

次に、大師堂に行くと、先ほどまでの荘厳な気持ちは白けてしまう。大師堂前の門をくぐって建物に入ると、大師堂の前には、所狭しとへんろグッズやお守り、みやげ物などが並び、土産物店の中でお経を詠んでいるような気になる。大師堂の門を出たところに、「仏足石」があった。尚美さんととき江さんが仏足をなでては、足の痛いところをさすっていた(右写真)が、効き



目があったかどうかは不明である。

礎石の上に荷物を置いて、身軽になって、先ほどの山下うどん店まで戻って昼食にすることにした。



手打ちうどん 山下

麺

手打ちうどん山下は、幹線道路に面した、軒の低い小さなうどん屋さんだったが、調理場には巨大な鉄釜がしつらえてあり、次から次にうどんが放り込まれ、茹で上がったうどんがどんぶりに移され、カウンターで待つお客さんに供される。客は、汁の入った給湯器のようなものから自分で汁を入れる。薬味にゆずを切ったものが添えられてるのが、ぶっかけうどんだ。地元の常連客が次から次にのれんをくぐり、たくさんのへんろにちょっと驚いた様子だったが、いつもと変わらない様子でうどんをすすっていく。

ゆでたうどんをビニール袋に入れ、汁をペットボトルに入れて持ち帰るおばあさんもやってくる。日本にアメリカのファーストフード店ができる前から、さぬきにはテイクアウトできるファーストフード店があったのである。しかも、それを利用するのがお年寄りというのが妙に面白い。

創業昭和30年。定休日、日曜日。席数32席、駐車場有、トイレ有。ちなみにメニューは、下記の通り。

かけうどん 大	260円
かけうどん 小	180円
ぶっかけうどん 大	340円
ぶっかけうどん 小	240円
玉売り(一玉)	70円
すし	120円



陽だまりの国分寺、そして胸突き八丁へ

うどんで腹ごしらえを済ませ、各自国分寺へ戻った。小春日和の温かな日差しを浴びながら、仁王門前でしばし休憩。福田さんは、平地にそぐわない靴のおかげで、少し足を痛めたようだった。靴を脱いで、足も深呼吸してところか。(右写真) これから追ってくる五色台への難所に向けて、少々不安でもある。



石井さん、両手に花の図

国分寺の松並木を通り、いざ山登りのへんろ道へ。



険

国分寺の境内を出ても、国分寺跡の中である。かつては、広い寺域を有していたことがわかる。国分寺跡から足を踏み出すと、のどかな住宅地を五色台に上る緩やかな登りとなる。振り返ると、平野の中に讃岐特有の形をした山とため池がいくつも見える。

道は次第に急になり、山の際に突き当たると見晴らしのよい墓地がある。墓地の脇をへんろ道が山中に向かっている。今回はじめてのへんろ道らしいへんろ道であり、今回はじめての山道でもある。一端舗装道路を横切るが、後は五色台の台地の上まで一気の険しい登りだ。

四国遍路がブームとはいえ、歩きのお遍路さんには合わない。81番白峯寺への道が実はもう一つある。国分寺の手前から五色台に登るルートである。そのルートは、五色台の高台に出てからは白峯寺までが近い。歩く距離は変わらないが、もしかしたら歩きへんろに合わないのは別ルートの方が登りはきつくないのかもしれないからなのかもしれないと頭をよぎる。隣の芝生である。

最後の急な階段を登りきると、自動車道路に出て、山が見えなくなった。ようやく台地の上にたどり着いたようだ。道は、自動車道路を横切り、森の中へと伸びている。道下さんは、ここで道を間違い、自動車道路を下つたらしい。それでも白峯寺には着くのであるが、戻ってきた。





五色台に登る最後の階段

道

五色台の台地の上に出てから、へんろ道は昼なお暗い森の中の道となる。天気は快晴であるが、うっそうとした木々の葉が覆いかぶさり、道には陽も差し込まない。昨日の雨のせいか、道は水を含んでおり、落葉を踏みつけるとわらじに水が沁みこんでくる。次第にわらじも水分を含んで重くなってしまふ。また、落葉は石ころも隠してしまい、とがった石をわらじの足で踏むと痛い。このわらじも何回目のあるき遍路だろう、次回は新しいものを作ろうかとも思う。

多少のアップダウンはあるものの、台地の上を縦走する感じでへんろ道は続く。途中、中学生と思われる集団とすれ違う。校外学習で五色台のハイキングでもしているのだろう。五色台は、坂出と高松の間に位置し、ハイキングにはちょうどいいコースかもしれない。そのおかげ



で、へんろ道も結構整備されていた。そういえば、「禪喝破道場」という青少年の研修所がこの山中にある。もしかしたら、中学生たちはそこに泊る予定かもしれない。我々にとっては、四国が「禪へんろ道場」である。

山中のへんろ道に、「十九丁」という三叉路がある。どこからの距離が十九丁なのか忘れてしまったが、左に行くと81番白峯寺、右に登っていくと82番根香寺と書いてあった。巨大なお地藏さんの石像が、へんろたちの安全を見守るように立っている。ここで、小休止をして、あとは一気に下ったところが白峯寺である。薄暗い竹林を過ぎると、今度は登ってくる中学生たちとすれ違った。さすがに登りでもさっさか登っていく。自分もかつてはそうだったと思いながら、明日はここを登って根香寺に行くのかと思うと、一步一步下るのがもったいない気になる。白峯寺はまだかなと思いつつ下っていくと、急に周囲が明るくなり、白峯寺の裏に出た。



しろみねじ

81番白峯寺

弘法大師が白峯山中に如意宝珠を埋めて、井戸を掘り、衆生済度を誓願したのが寺の始まり。その後、智証大師が白峯大権現の神託を受け、瀬戸内海の流木で千手観世音像を刻み、本尊として祀ったと伝えられている。保元の乱で讃岐に流され、崩御された崇徳上皇の御陵があり、その菩提を弔う頓証寺殿があります。また、境内入口の門は、七つの棟をもつ塀重門で、古い瓦屋根が段々になった高麗門形式です。



先に着いたグループは、すでに納経帳も記帳済みだった。全員がそろったところで、本堂・大師堂とお参りをした。本堂と大師堂の間のもみじの紅葉が、傾きかけた陽を浴びて輝くようにきれいだった。

お参りを終えると、急に辺りが冷え込んできたように感ずる。早々に今夜の宿、坂出のかんぼに行くことにした。皆、早く宿に着きたいと見えて、道も確かめもせずとどんどん歩き、かんぼの宿がどこか見当がつかなくなったとき、タイミ

ング良く、目の前を宿のバスが通った。場所を聞こうと思ったら、乗ってくださいとのこと、どやどや乗り込んで連れて行ってもらうことにした。わずか200mぐらいの距離だったが、ありがたさは距離に関係なかった。





観

白峯寺から出ると、眼下に瀬戸内の海が開ける。よく見ると、船がくぐっていく瀬戸大橋、その袂に坂出の街、町の向こうに昨晚の宿「瀬戸内荘」があるあたり、左に目をやると遠くに讃岐富士、その手前に79番高照院があるあたり、そして国分寺に向かって歩いたへんろ道と俯瞰できる。2日目の朝から昼前ぐらいまで歩いたところである。1日目に近く見えた讃岐富士も、ずいぶん遠くに見えた。

宿について、少しすると讃岐富士の後ろに夕日が沈むサンセットショーのはじまりとなった。どの部屋からもサンセットビューが楽しめた。とりわけ、大浴場から裸で見た夕日は格別だった。

夕食は、舞台つきの大広間。舞台つきということは、「アントニオ・セイスイショー」の幕開けである。ひととき楽しませていただいて部屋に戻ると、一日18kmと山道の疲れで、ほどなく高いびきとなった。



こちらは、アントニオ・セイスイショー。舞台上で演じたのを見たのははじめてなので、初舞台？

3日目



82番 根香寺へ

三日目。白峯寺から根香寺までのへんろ道は、五色台を西から東へと渡り歩く感じである。途中までは、昨日下ってきた道なので、結構な登りもあったが、心の準備もできていたと見えて、さほどきつくも遠くも感じることなく歩くことができた。十九丁という三叉路からの登りも短く、程なく最高地点まで着くことができた。かんぼの宿の温泉が効いたのか、それとも、三日目で身体が慣れてきたのか快調である。

へんろ道から舗装道路に出たところには、足

尾大明神というお堂があり、幟など並んでいてにぎやかである。また、ドライブインや土産物店・茶店などがあり、天気の良い休日には家族やカップルのドライブコースになっているのだろう。舗装道路から再びへんろ道に入るところには、観光のみかん園もあり、レジャー客がたくさん来るにちがいない。

へんろ道は再び山中に入り、下りとなる。境界の杭に根香寺と彫っており、すでに寺域らしく、程なくして、紅葉真っ盛りの根香寺に着いた。



82番根香寺

弘法大師が青峰山で草庵を結び、五大明王を祀ったのがこの寺の始まり。その後、智証大師が巡錫した折、ケヤキの大木の下に白猿をつれた山王権現が現われたと伝えられています。智証大師は香木で千手観音を刻み、本尊として根香寺を開基しました。境内の五大尊堂には不動明王を始め、金剛夜叉明王、大威徳明王などの五尊像が安置されています。また、本堂の回廊には、信者が奉納した3万3333体の観世音小像が並んでいます。

香

ねごろじは、和歌山県にもあり、和歌山のお寺は、新義真言宗の大本山で根来寺と書き、82番は根香寺と書く。今回の案内状に書いた根来寺は間違いで、正しくは「根香寺」である。

下り坂のへんろ道を降りてくると、にぎやかな声が聞こえる。近づくにつれ、それが車の誘導のための無線の声だとわかる。根香寺への車道は狭く、車がすれ違えないので、境内と下の駐車場とで車のやりとりをしなければいけないのだ。せつかくの山中の静かな札所が台無しである。その上、境内の駐車場は車が仁王さんにお知りを向けるように作られてある。排気ガスを浴びた仁王さんは臭いと言わず、「におう！」と言うことだろう。

仁王門をくぐると、下りの石段があり、その先に本堂へ上がる石段が待ち構えている。紅葉したもみじが覆いかぶさり、落ち着いた佇まいである。

石段を上った本堂は小ぶりだが、周囲を回廊が囲んでいる。この薄暗い回廊の中に、本尊の観音様にちなんだように小さな観音様が祀ってある。本堂前の狭い庭に、我々の般若心経が響き渡った。



小休止して、紅葉真っ盛りの根香寺を後にした。ここから、観光みかん園まで戻り、鬼無町までは一気の下りである。



鬼無までの下りは、舗装道路である。曲がりくねった道を歩き始めると、いきなり視界が開けて、眼前に瀬戸内の海が広がる。こちらは、五色台をはさんで高松側の瀬戸内海である。小島がいくつも浮かぶ、穏やかな海だ。

途中で、鉄人小貫さんが女性のリュックを二つ背負い、とつと先に行ってしまった。まるで、シェルパのようである。

下っていくと、盆栽の畑が左右にあり、下りきったところで盆栽の市が開かれていた。このあたりは、盆栽の町なのだそうだ。





食

盆栽市場を過ぎると、すでに平地である。ようやく五色台から下りてきたわけである。下りてきたから言うわけではないが、ここからは変化のない道になるわけで、山に登りついたときの達成感もなければ、急に目の前が開けて雄大な景色を見ることもない。ひたすら札所をめがけて歩くだけになる。でも、その前にそろそろ昼時、定番のさぬきうどんを食べよう。

今日のさぬきうどんは、鬼無駅そばの・・・そばだがうどんや・・・「北山」である。それにしても、鉄人小貫さんの姿が見えない。さてはあのスピードから察するに、すでにかなり先まで歩いており、先に一宮寺まで行くつもりだろう。

小貫さんに申し訳ないが、残された者は北山に入ることにした。外見は、どこの町にでもありそうなうどんやさんだが、中に入ればカウンター

で注文をして、うどんをもらってから精算をするセルフ方式に変わりはない。みな、手馴れた感じで、うどんを手にした。ただし、カレーの匂いに吊られて、カレーうどんを注文した武さんは、後で、「あれはボンカレーだった。」と後悔しきりだった。やはり、郷に入れば・・・で、ぶっかけかかまあげに限る。

ここが今回最後のさぬきうどん。さぬきうどんといえば、冷凍食品も出回っているが、今回三度食べてみて、その概念が変わった。ただ固くて、腰のあるうどんがさぬきうどんではなく、もちもちとした食感の中に腰があるうどんとでもいうのだろうか、しいて言えば、そのもちもち感こそがさぬきうどんの特徴かもしれない。とすれば、うどんは咬まずにのど越しで味わうというもの納得がいった。

これで今年の禅童会のうどんは一味違うはずだ。



縁

「北山」を後にして、集落の路地を縫うように通るへんろ道を歩いていると、自転車に乗ったお婆さんが、この先にお接待所があるからぜひ寄って行きなさいと教えてくれた。

本津川を渡ったところに、古民家を改装した真新しい建物があつた。これがくだんのお接待所だという。外には縁台があつて休憩できる。中ではお茶や水が自由に飲めるようになっており、大きなテーブルもあつて快適そのものである。上がり框から続く板の間には仏壇もあつて、どうやらここにお住まいのようである。聞くと、四国八十八ヶ所を世界遺産にする運動もしているとのこと、名前を記帳していってくれとのこと。記帳すると、関東では千葉県が一番人数が多くなったと喜んでくれた。なにしろ、21名の大所帯である。お接待していただき、お別れをした。

岩田神社の参道を歩いていると、稲田さんがストックを忘れたことに気づき戻ろうとすると、先ほどの自転車のお婆さんが、ストックを振りかざしながら追いかけて来ていた。ありがたい。

香東川を渡ると、次第に住宅街になってくる。交通量の多い通りから左折するところに、大きなホームセンターがあり、店先を拝借して休憩とした。根香寺から山を下って一宮寺まで約12キロ、皆足に疲れが出て来ている。店先に腰を下ろしていると、若い女性の店員さんが近づいてきたので、店先をお借りしますというと、快く返事してくれた。この店先は昔からのへんろ道だから、よくおへんろさんが通るのだそう。でも、こんな大人数の歩きへんろは見たことがないと驚いていた。ツアーかなにかですかというので、お寺の行事ですという、さらに驚いていた。

83番 一宮寺

義淵僧正が開基したといわれ、当時は寺号も大宝院と称し、法相宗に属していました。その後、行基が入山して諸堂を修築し、名も一宮寺に改めました。大同年間（806～10）に弘法大師が巡錫して聖観世音菩薩像を刻み、本尊として安置したと伝えられています。境内には薬師如来の石堂があり、その台座の下には地獄へ通じる穴があります。この中に頭を入れると、心がけの悪い人は石の門が閉まり、頭が抜けなくなるといわれています。



一宮寺の仁王門。

満

ホームセンターから国道32号を渡り、後続を待っているとガソリンスタンドの店員さんがこっちと指差してくれた。道しるべもなく、違う道に行きそうだったが、後続が離れていたおかげで、道に迷わずに済んだ。小さな分譲の宅地の間をすり抜けるようにへんろ道を進む。かつては、田んぼの中のあぜ道のようなへんろ道だったのだろうが、あとから住宅ができてきた様子が良くわかる。一宮小学校を横に見ながら、間もなく83番一宮寺に着いた。

やけにこじんまりした門だと思ったら、へんろ道歩いて来ての一宮寺の入り口は裏門である。今回最後のお参りをする。大師堂に行くと、どうぞ中に入ってお参り



くださいと、おばさんが声をかけてくれた。道中安全のお灯明をお接待させていただきますとも言ってく



れた。般若心経が堂内に満ちたようだった。ようやく、83番までお参りすることができ、いよいよ次回は、八十八ヶ所結願という思いが湧いてきた。

一宮寺の山門は、隣の田村神社側にあり、名前からしてもこの寺も神仏分離令で、移されたお寺のようである。この神社の参道を出て、左に行くと、高松空港行きのリムジンバスのバス停がある。一同無事今回の旅を終えることができた安堵感が、リムジンバスの中に満ちていた。

お疲れ様でした。



第11回四国あるき遍路の旅
記録集

平成18年12月吉日 発行

撮影 福田 和夫
石川 信子
著者 宮田 宗格
編集 宮田 宗格
発行 臨濟宗妙心寺派
圓福寺

編集後記

四国から帰ったら、右ひざがはれていました。今までではじめてのことでした。ここまで、足掛け6年、6歳馬齢を重ねたわけで、ひざもガタがきたのかもしれない。早速、グルコサミンの錠剤を飲みはじめました。

前回の記録集同様、少しの空いた時間などに少しずつ編集しましたので、前後のつながりが悪かったり、文の調子が合わなかったりなどはどうぞご容赦下さい。

また、この冊子は私観に基づいた記録をまとめたものとしてお読みいただけ

ばと思います。

足りない部分は、お読みくださった皆様の感想や思い出を行間に埋めながらご覧いただければ何よりです。

なお、編集後の校正や見直しなどはほとんどしておりませんので、誤字脱字などなどございましたら、それもご容赦下さい。

では、次回もお楽しみに・・・。